

立命館大学

国際平和ミュージアムだより

KYOTO MUSEUM for WORLD PEACE

● CONTENTS ●

スポット

2 ミュージアムの収蔵品62
『日本の皆様』巻頭
つれづれ3 「理を尽くす」と「情に訴える」の間
立命館大学国際平和ミュージアム名誉館長
安斎 育郎〔立命館大学名誉教授〕

館長だより

5 マイロの生き方から見たこと
立命館大学国際平和ミュージアム館長
モンテ・カセム〔立命館大学政策科学部教授、立命館理事補佐〕ここが
見どころ7 「空襲の記憶をどう受け継ぐか」
立命館大学国際平和ミュージアム副館長
田中 聡〔立命館大学文学部教授〕運営委員
リレー連載8 《国家安全保障戦略の精神》と《平和ミュージアムのこころ》とのはざままで
立命館大学国際平和ミュージアム運営委員
植松 健一〔立命館大学法学部教授〕ミュージアム
おすすめの
一冊10 国森康弘 著
『アンネのバラ—40年間つないできた平和のボタン—』（講談社 2015年5月刊）
立命館大学国際平和ミュージアム運営委員
金森 絵里〔立命館大学経営学部教授〕

ミニ企画展示

11 開催報告 (2015年2月～6月)
京都・大学ミュージアム連携
立命館大学 × 京都外国語大学 学生コラボ企画展
紙の文化博物館
中川 智絵〔前 京都外国語大学非常勤講師〕
13 平和とスポーツの写真展
大阪成蹊大学教育学部
赤沢 真世〔前 立命館大学スポーツ健康科学部准教授〕

事業報告

- インターンシップ受け入れ
- 2015年度春季特別展 山本宗補写真展「戦後はまだ…刻まれた加害と被害の記憶」
- 戦後70年平和企画 第94回ミニ企画展示 日本平和博物館会議戦後70年共同展示
- チャレンジ体験受け入れ
- NGOワークショップ報告
- 戦後70年平和企画 夏休み親子企画「へいわ」ってなに?? 2015
- ボランティアガイド養成講座修了式
- 2014年度 資料・図書など寄贈者一覧
- 世界の平和博物館の紹介
立命館大学国際平和ミュージアム副館長 山根 和代〔立命館大学国際関係学部准教授〕
- ボランティアガイド活動日誌
立命館大学国際平和ミュージアム ボランティアガイド・平和友の会 田川 淑子
- 平和へのメッセージ
- 2014年度入館者状況 (2014年4月～2015年3月)、編集後記
- ミュージアムインフォメーション

日本平和博物館会議
ASSOCIATION OF JAPANESE MUSEUMS FOR PEACE立命館大学
国際平和ミュージアムKyoto Museum for World Peace,
Ritsumeikan University

『日本の皆様』



「日本の皆様」
1945（昭和20）年8月 10.6cm x 13.8cm

これは、1945年8月に、アメリカ軍が日本の都市に撒いた伝单です。伝单とは、「敵軍将兵や国民の戦意を低下させたり、投降をうながすために、あるいは味方の戦意を昂扬させるために作られた宣伝ビラ」（一ノ瀬 p.5) のことです。紙の爆弾とも呼ばれ、一五年戦争時は、各国軍が飛行機で空から伝单を撒いていました。

この伝单の表面には、8月9日付で日本政府が天皇の君主統治者としての権利（いわゆる国体の護持）が認められればポツダム宣言受諾の用意があることを連合国に申し入れた公式通告（の日本語訳）が、裏面にはそれを受けてアメリカ政府が8月11日付で回答した内容（の日本語訳）が印刷されています。連合国側は、降伏後の日本の統治権は連合国の最高司令官の下に置かれること（降伏と占領）と、日本政府の体制は、自由に表明された日本国民の意思によって定められるものとなる（民主主義）ことを説明しています。右上の番号「2117」は、「マリヤナ時報」（アメリカによる日本軍向け伝单）の号外番号です。

当時、このような伝单は、防諜上問題があるとされ、保管していることがわかれば厳しく追及されるものでした。拾った人は警察などの公的機関に届けることになっていました。『週報』第240号（1941年5月14日発行）の「特集 秘密戦と防諜 国防保安法の解説」によれば、

「防諜とは、武力戦以外のあらゆる攻撃に対する防衛」（P.5）であり、「銃後の国民生活を攪乱する生活不安」（P.18）を発生させることは生産や思想を戦争遂行に集中させることを妨げる謀略だと戒めています。しかし、戦争末期、米軍が撒いた伝单の予告通りに都市空襲が行われたことなどから、人々は伝单を信じるようになっていたとも言われています。

連合国側の回答は即座にハワイで日本向けの伝单を制作していた日本人捕虜グループのもとに持ち込まれました。11日から12日にかけて翻訳、推敲、ビラ制作が行われ、サイパンへ電送されて写真製版され、サイパンから飛び立ったB29が13日の午後5時ごろには東京を中心に、また14日早朝には大都市にこの伝单を撒きました。14日午前、内大臣木戸幸一は、この伝单が終戦に関して政府が伏せている情報を国民に暴露するものであり、時間がたてば混乱を招くと天皇に進言します。そして午後には、ポツダム宣言受諾の決断が下り、この伝单は、アメリカの狙い通りに敗戦による戦争の終結に影響を与えるものとなりました。（一ノ瀬、上前）

現在当館には、現物・複写あわせて5件「日本の皆様」が収蔵されています。5人の方が、貴重な資料としてお持ちくださったのですが、館で聞き取った日付は、必ずしも一致しません。

1999年に寄贈されたものは、「1945年8月12日に大阪城内に投下されたもの」と伝えられました（これは、歴史的には記録違いとなります）。また、2012年に寄贈をされた女性は、1945年8月15日の朝7時ごろに当時住んでいた聖護院東大路通丸太町通上ルでこれを拾ったと記憶しています。これは、14日朝に撒かれたものが残っていたのか、それとも、空から降ってきた降伏、占領、そして民主主義のメッセージが、8月15日という象徴的な日付が後にメディアで宣伝される中で結びついて記憶されたのかもかもしれません。

（学芸員 兼清順子）

参考文献

一ノ瀬俊也、2008、『宣伝謀略ビラで読む、日中・太平洋戦争 空を舞う紙の爆弾「伝单」図録』柏書房。
上前淳一郎、1976、『太平洋の生還者』文芸春秋。
情報局、1941『週報』240。

「理を尽くす」と「情に訴える」の間

立命館大学国際平和ミュージアム

名誉館長 安 斎 育 郎

(立命館大学名誉教授)

■ 川柳コンテストの選者を務めて

去年に続いて、ある出版社が主催する川柳大会の選者を務めました。テーマは「歩む」。東日本大震災から4年を経て、被災者も支援者もそれぞれに歩を進めつつあります。私はたくさんの作品を楽しみながら、以下のような総評を書きました。

「震災、原発事故、戦争へ向かう軍事化の波、そして、病氣や加齢…。人生には、歩みを阻もうとするさまざまな要因が立ちはだかる。それらにへこたれず、越し方を振り返り、足場を確かめつつ、行くべき方向を見定めて、仲間とともに、あるいは独りででも前進する人々の姿。上から下から斜めから右から左から光を当て、五・七・五の音律、日本語特有の言葉のリズム感に乗せて、人生や時世を茶化し、揶揄し、風刺しつつ、問題の本質をえぐる。『軽やか』に『おかしみ』を滲ませながら本質を『穿つ』—この3つの要素をもつ短詩としての川柳は、素敵な文化だ」。

入選作は、「海に逝く誰かの分の今日歩む」(宮城県・木立慈雨さん)、「怒怒怒怒怒 平和行進突き進む」(兵庫県・吉田利秋さん)、「したたかに生きて廃炉を見届ける」(福島県・三浦一見さん)、「ヒマワリの覚悟を僕も持ち歩く」(京都府・前中知栄さん)、「復興の絵にまだ足りぬ色がある」(熊本県・夏舟さん)、「片減りの靴底だけが知るあゆみ」(埼玉県・雲がくれさん)の6句。

年配の人なら、「海に逝く…」の句から戦時中「第二国歌」扱いされた「海行かば」を思い起こす人もいるかもしれません。「海行かば水漬く屍 山行かば草生す屍 大君の辺にこそ死なめ かへりみはせじ」(海を行けば水につかった屍となり、山を行けば草むす屍となって、天皇の足元にこそ死のう。振り返るまい)。

また、この句から海の藻屑と消えた若い兵士たちに思いを寄せて、『きけ、わだつみのこえ』を想起する人もいるかもしれません。「わだつみ」は、「わだ(海、朝鮮語のパタと同源) + つ (…の) + み (神)」で「海の神」のことですね。「大震災の津波で海に呑みこまれて犠牲になった人の分を、今生きている」というこの作品の句意は、被災者への優しい思いと、今を大事

に生きようとする静かな決意を感じさせます。

「怒怒怒怒怒…」の句は、言葉の響きにダイナミズムを感じますね。私はこの作品に、「ドドドドッ!」というのは怒涛のベクトル。現状への怒りを込めて、平和に向かって一歩また一歩」という評をつけました。やがて作者の吉田利秋さんから、丁寧な手紙とご自身の川柳句集が送られてきました。

■ 吉田利秋さんの川柳句集

「万歩計ごろ寝しながら振っている」「通知簿に先生の誤字二つ三つ」「迷ってる僕にみんなが道を聞く」「走るから転ぶ 歩いて遅刻する」—吉田利秋さんの川柳は「温かいカラカイ心」があって面白いだけでなく、人生訓が埋め込まれていてハッとさせられます。「迷ってる僕にみんなが道を聞く」は、「人生相談とはそもそもこんなものだ」と教えてくれますし、「走るから転ぶ 歩いて遅刻する」は、生き方を問われているようにも思えます。

吉田さんは戦後3年目の生まれ。神戸の公立高校で教員を務めましたが、やがて、「川柳界の与謝野晶子」とも呼ばれた時実新子さん(1929~2007)に師事しました。『川柳集 新しいサイフ』(2003年)、『川柳集 ピンチはチャンス チャンスはピンチ』(2012年)などを刊行しています。

私は今年75歳。誕生日だった4月16日に「後期高齢者入り」を記念して大腸ポリープの内視鏡切除術を受けたのですが、予後のため過ごした病院のベッドでいろいろな成分の点滴を受けながら、何もできずにひたすら「点滴静注バッグ」の液面が下がるのを睨みつけていました。正直、「時間が経つのは何と遅いことか」とイライラしましたね。ところが吉田利秋さんの手にかかる、「しりとりを点滴終わるまで続け」となるのです。点滴速度を勝手に変えられない以上、不愉快を愉快に変えて時を遣り過ごす—これも生き方の知恵ですね。

後期高齢者ともなると、自己評価では「うん、うまくいった!」と感じているような場合でも、客観的には「失敗」ということも経験します。吉田さんの川柳

「完全に直して残るネジふたつ」は、そんな状況を見事に表しています。何事も独りよがりにならないように、己の弱さを自覚して進めたいものですが、歳をとると融通や小回りが利かなくなって、自分の勝手なペースで突っ走りやすいから、私もせいぜい気を付けることにします。

■ 「理」と「情」のはざまで

吉田さんの川柳句集『ピンチはチャンス』の中に、「女生徒の涙に負けたお説教」という句がありますが、どんな意味かちょっと気になりました。すると、巻末にこの句の背景にある物語がエッセイとして載っていました。

吉田さんが高校の教員をしていたころ、1年生の男子生徒が書置きをして家出したのですが、翌日、律儀にも学校に挨拶に来たそうです。吉田先生は、指導部の熱血先生と二人がかりで学習の大切さなどを説教すること2時間、しかし生徒の意志は固く、「一人前の板前になって帰ってくるから引き止めないで下さい」と言うばかり。ところが、最後の瞬間に思いがけないことが起こりました。相談室の前に同級生の女生徒が待っていて、部屋を出た男子生徒に、「今やめないで。一緒に卒業したい」と涙ながらに話しかけたら、家出の決意もどこへやら、「分かった、学校に行くわ」と豹変！これには吉田先生も絶句。いったい自分たちの必死の説得はなんだったのか？

『星の王子さま』で知られるアントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリ（1900～1940、フランス）の言葉に、「愛は互いに見つめ合うことではなく、一緒に同じ方向を見ることだ」というのがあります。先生方は確かに生徒への愛の心で2時間「対面」して懸命に説教したのですが、女生徒は、物理的には「対面」していたけれど、心では「一緒に卒業しようよ」と、見るべき同じ方向をととても具体的に提起したのですね。2時間対10秒、女生徒の圧勝でした。

理屈に基づく説得は文字通り「理屈っぽい」ので、そのままストンと相手の胸に落ちるとは限りません。ましてや説教調になれば、反発さえ感じさせて逆効果に陥ることもあるでしょうね。平和ミュージアムも、歴史学などのきちんとした学問的達成を土台に据えながら、「理屈ずくの展示」だけではなく、「ハート・キャッチングな展示」も心がけたいものです。何しろ、国際平和ミュージアムの合言葉は「みて、かんじて、かんがえて、その一歩をふみだそう」ですから、「感じる」

前に「考え込む」ようなことにならないよう、吉田さんのエピソードの女生徒のような「10秒で心に訴えかけられる力」も大切にしたいと思います。

■ 戦後70年に『星の王子さま』を読む

よく知られているように、サン＝テグジュペリは第二次世界大戦にも従軍した飛行士でしたが、1944年7月31日、偵察飛行のために地中海のコルシカ島を飛び立ったまま行方不明になりました。残骸は半世紀以上を経た1998年にマルセイユ沖で発見され、2003年に引き上げられましたが、その5年後、ドイツ軍の元操縦士がサン＝テグジュペリの偵察機を撃墜したことを証言しました。実は、元操縦士もサン＝テグジュペリの愛読者で、「彼だと知っていたら撃たなかった」と言ったと伝えられます。作家と愛読者が敵対関係に陥って殺し合いをするのが、戦争です。逆に言えば、文学は敵対関係にある国の境をこえて感動を呼び覚ます力があるのですね。

『星の王子さま』は、体裁は児童向けファンタジーのようでありながら、実は、子どもの心を忘れた大人たちへの痛烈な批判的メッセージ性を含む作品だと言われます。また、「星の王子さま」が住む小さな星には、「やがて星を砕いてしまうほど巨大化する3本のバオバブの木」の話が出てきますが、それは「ドイツ・イタリア・日本の枢軸国を芽のうちに摘み取らずに放置したために第2次世界大戦を招いた国際社会」を暗示するものだという問題提起もあります。不幸な時代に巡り合わせた飛行機乗り作家の批判精神に満ちた作品と言えるでしょうか。こうした文学作品の力を知るにつけ、歴史的事実を正確に記述する歴史学研究成果をしっかりと踏まえつつも、心豊かにファンタジーの世界に遊んでハートフルなメッセージを伝えるような文学や芸術の力を活かしたいものだと、心から願います。

「氷が解けると何になる？」と聞かれて、「水になる」と答えるのは科学的と言えば科学的ですが、面白みに欠けますね。でも、「春になる」と答えたらどうでしょう。ハッとしますね。そして、思わず、「なるほど！」と笑いを誘われます。ミュージアムもまずはハッとさせ、心に共感を呼び覚まし、それが「なぜ？」と考えるきっかけになるような、そんな企画を心がけたいものです。

マイロの生き方から見たこと

立命館大学国際平和ミュージアム

館長 モンテ・カセム

(立命館大学政策科学部教授、立命館理事補佐)

私は大津市比叡平に住んでいます。京都市からカーブが多い志賀越を10分程度上り、延暦寺への有料道路の入り口の向かい側にある団地です。半世紀近く前開発された自然環境は豊かな所で琵琶湖の眺めも素晴らしいです。山を歩くと走る鹿が見え、山の斜面にイノシシが掘った跡があり、心が落ちつく場所です。この界隈に2011年秋にイギリスから一匹の犬がやって来ました。当時10歳のマイロ¹はボーダーテリアという種の珍しい犬です。自分のテリトリーを堅く守る意志が強く、240坪の広い庭を真剣にパトロールしている姿は比叡平の住民に迷惑だったと思うのですが、散歩に連れて行くと不思議で周りから愛されていた様子も見えました。これは比叡平の住民の心の大きさとマイロの性格上の潜在的な何かがあったからではないかと思いました。いまだに私には不思議な謎です！

画家、音楽家、建築士、庭師、医者、研究者、板金、物流会社等、様々な職種で構成されている地域です。水は美味しくて、活断層から離れている山で比較的安全な場所です。家庭菜園で我家も含めて野菜や花を育てている方も多いです。開放的なライフスタイルを求めている「京都難民？」が多いとも言える地域です。必要に迫られたら比較的自立できる地域ではないかという印象を持ちました。年数日間豪雪で京都や大津側に降りづらい時に、また近年年一回程度の大雨の時に京都や大津側に降りる道が閉鎖される時以外は、それ程不自由を感じないことはこの自律的空間の強みとも感じます。もし比叡平が独立した国になれば上記の職種の中から文部科学大臣や厚生労働大臣や国のガバナンスに必要な重要なポストに最適な方を見つける可能性は十分あると思います、新共和国の大統領はどんな人であれば相応しいかに周りの友人たちと議論が深まったのです。皆に愛される大統領がベストではないかと思ひ、軍配がマイロにあがりました。

マイロはたった四年間の任期で、数多くの国の名門首脳に負けない業績を平和的な側面であげました。尻尾を振りっぱなしで散歩中に会った新共和国比叡平の国民に挨拶をしたり笑顔で皆が手を振ったり、小学校の子どもたちが立ち止まって大統領の頭をなでたりする日々でした。他の犬を敵と思っていたマイロには、人間が大好きな友でした。もてなしの心を持って我家を訪問するお客様を相手にしているマイロを見ると、真に人の心にスーッと入りやすい何かを持っていた。フェイスブックでのフレンズが、飼い主の私よりはるかに多かったことも事実です。比叡平共和国の初

代大統領マイロの生き方から、我々人間社会が学ぶものがあるかと最近考え始めました。

イラク侵略によるブレアの人気低下、今日の日本の政権の支持率が半分近くに下落したことなどを見ると、なぜ吠え続けて庭の淵を走り回って道路を歩いている比叡平の住民を困らせていたマイロが皆様に愛されていたかを考えさせられます。人間の複雑な社会構造や行動を犬の単純な生活圏と比べることはどうかと思われる方々もいるかも知れませんが、まずマイロの行動は明確で、その目的もはっきりしています。自分の生活圏の中心である家を守ることが中心です。他人の家を守るとはその家の犬や住人に任せている行動です。ある意味では戦後日本の自衛圏の範囲と似ているとも言えます。たとえば比叡平の大統領として他人の家の守りにも自分が責任を持つことになるのであれば、マイロや他の家の犬たちはどんな行動をとるべきかを想像するとはるかに複雑で、時によって不透明な領域（グレーゾーン）で判断を要求させたりすることになるのではないかと思います。まさに国際連合の常任理事国のもとにある集団安全保障と日本の自衛隊のPKO派遣を含めた行動範囲の議論は、第一次湾岸戦争時の反省と第二次湾岸戦争の行動で決まってきましたが、今日の集団的自衛権、シーレーンの安全保障等をどう位置づけるべきかは悩ましいところです。

間違いなくボーダーレスでグローバル化された経済環境の中にいる日本の今の状況は以前と大幅に変わっています。戦後日本では、自分の家を守ることに集中できた時代があったと言えます。昭和40年代の後半、日本国の総生産数（GNP）の12パーセント程度を輸出から稼いでいた時代でした。しかし、近年この構造は大幅に変わってきています。数年前から言われていることですが、日本の国民所得の半分は今、海外発生だそうです。多くの日本の多国籍企業の利益率の7割以上が同様に海外発生型です。社員構成でもこれらの企業内の日本人社員より外国籍の方が多く、企業活動が最も活発に行われているのは従来の先進諸国、西欧諸国や北米ではなく新興国や発展途上国だそうです。新興国は人口大国も多く、笹川平和財団の最近の調査報告書では、最貧層は以前と異なり最貧諸国より日本との経済交流が伸びている新興国が絶対数としてはいちばん多いそうです。この意味合いは日本にとって重要です。

日本の富の発生地では、社会経済格差によって不満がたまり秩序維持ができなくなる恐れがあります。そ

のような時に何をすればよいかと考えさせられます。問題が深刻になると、国内武力紛争に展開する可能性があることです。パキスタンとアフガニスタン国境でタリバン軍、イエメンでアルカイダ、シリアとレバノンでのIS軍の活動を見ると国境なきテロが誕生していると言えます。まともな法治国家や民主主義の国々は、このような場合どのような行動をとればよいかと迷いの多い時代です。そこで、安全保障や秩序維持活動も自国の国境を越えて行わなければならない可能性が出てきます。一ヶ国より集団的に行動をすることの方が好ましいとも言えます。この様な環境の中で平和憲法の下、平和的産業基盤で発展してきた日本という国の在り方、いき方が問われます。どのような解決策を目指せばよいのか、今日本で起きている集団的自衛権等についての議論の根底にあります。国の行動と憲法の矛盾をどちらかを修正・改正・解釈等で解決していくことより、もっと根本的な課題だと感じます。

国連の管轄内とはいえ、第二次湾岸戦争のイラク侵略は誤った情報の下の判断であったという教訓も我々が忘れてはいけません。この様なことの繰り返しを避けるために、日本はどんな行動をとるべきかを考えさせられます。いま国会で論じている集団的自衛権問題は、この状況に対する判断を日本国民に求めていると言えます。つまりマイロは一家の番犬ではなくて比叡平の大統領として行動せざるを得ない状況に置かれると行動に対する判断は違ってくるといことです。国際連合にカナダ政府が提出した「Responsibility to Protect（人を守る責務）」ⁱ⁾、以下R2Pは人間の安全保障に対する行動指針と言えます。R2Pは三つの責任を明確にしようとしています。その一つは武力行為の事前防止の責任。これは日本のODA等で見事に果たしている責任と言えますが、相手国の政府側の要請中心で行っているのも、その要請がなくても大量に虐殺がされている場合、集団的自衛権の範囲内で行うための行動指針です。二番目に武力行為や数多くの方々の命が危険にさらされる恐れがある時、事前に内政干渉を許す範囲を描いています。この責任を果たすことは日本の憲法九条の条文等にも書いていることと大きく矛盾するところですが、三番目の責任として、もしも二番目の責任を果たせば破壊されたものの再建をする責任です。この点は日本が多くの場合は見事に果たせる責任だと思いますが、集団的判断が誤った時、それに対する警告を日本が出したうえであれば再建をす

るのになぜ日本国民の税金を投入すべきかと言う疑問がわきます。R2Pは人間の安全保障の責務を取り上げ、その根底にあるのは「自衛」の範囲の再定義です。この新定義に日本の戦後の生き方が耐えられるかは課題ですが、他にも考えられる解決策を同時に検討すべきであると思います。

国際社会では日本人は無口で謙虚ですが信頼できる国民だという評判です。この信頼を友情に変えることを考えると、教育機関の国際化が大事な役割を果たせるソフトパワーだと思います。6年間勤めていた立命館アジア太平洋大学のことを思い出すと、130ヶ国以上の在学生・卒業生との関係を強化すればこのソフトパワーの種をまいているものといえます。同じ釜で飯を食いながら学び、遊ぶ同世代の若者の間に生まれてくる友情を肌で感じていました。夏や冬休みの時、若い日本人が国際学生の友人の母国を訪問し、その方々の家に泊めてもらいその国を内側から見るができます。それによって他文化への理解力と他者との友情が深まります。この様な国境を越えた交流から出る絆を外交戦術の中心に置けば、マイロが人の心に入っただけの様に、多少他人に迷惑をかける時があっても許してもらえとも考えられます。日本の大学のキャンパスライフが国際色豊かであれば文武両道でソフトパワーを生み出す可能性が高まります。それを目指した「場づくり」をすれば国際社会に平和を浸透することにもつながります。



マイロ

i) マイロは2015年6月18日に永眠しました。

ii) 大規模な人権侵害や戦乱などによって多数の住民が悲惨な状況に陥っているにもかかわらず、領域国の政府が適切な措置をとる意思や能力をもたないために放置されているような場合には、国際社会が人道的観点から介入して住民に救済の手を差し延べる責任があるという考え方。通常の国際関係においては、領域国の了解なしにこのような介入をすることは主権侵害に当たり、認められない。しかし、領域国政府が無能ないし無力であるような場合には、非人道的状況から住民を救うために、国際連合（国連 UN）の安全保障理事会（安保理）の承認を得て、場合によっては軍力行使してでも、介入すべきであるという新しい方針である。この考え方は、2001年の「介入と国家主権に関する委員会」の報告書で最初に問題提起され、04年の「国連事務総長ハイレベル・パネル」報告書、05年のアナン国連事務総長報告書、同年の世界サミット成果文書などによって支持され、同年10月の国連総会決議によって公式に承認された。

「空襲の記憶をどう受け継ぐか」

立命館大学国際平和ミュージアム

副館長 田中 聡

(立命館大学文学部教授)

文学部地域研究学域の京都学専攻教員の田中聡です。この4月にミュージアム副館長に就任しました。宜しくお願いします。

私のもともとの専門分野は日本古代史ですが、近代以降の日本における歴史意識の変容についても以前から関心があり、近年はさまざまな地域資料の掘り起こしを進め、それをもとに京都地域住民の「過去の記憶」について考えています。



京都市東山区妙法院前側町の『馬町空襲の地』碑の前で
(2014年7月26日、田中聡撮影)

写真は、昨年7月に学生と共に行った「馬町空襲」についての調査の様子です。

アジア太平洋戦争末期の1945年1月16日、米軍のB29爆撃機一機が京都市上空に飛来し、東山区の東大路五条周辺に爆弾を投下しました。発生した火災によって寒空は赤く染まり、死者40余名、負傷者50余名の犠牲者が出、143戸の家屋が全半壊し、修道国民学校の講堂にも大きな穴があいたといわれています。ところが当時、この空襲に関する情報は軍によって機密扱いとされ、新聞等でも「被害は軽微」とだけ報道されるのみで、詳細が明かされることはありませんでした。また戦後の占領期には、GHQによって戦災に関する情報統制が行われ、さらには敗戦直後の混乱のなかで公文書が多数処分されたこともあって、京都の空襲被害に関する正確な情報が地域に共有される機会は、その後長い間得られぬままだったのです。

1974年には「京都空襲を記録する会」と京都府立総合資料館の合同調査で、空襲を目撃した住民の証言がはじめて公にされ(『かくされていた空襲』、汐文社)、1990年代に入ると歴史学者の吉田守男氏が、米軍関連の資料をもとに、敗戦直前の1945年7月まで京都が原子爆弾の有力な投下目標とされていた事実を発見しました(『京都に原爆を投下せよ』、角川書店、1995年)。また小林啓治氏・鈴木良氏らにより、戦後

に広まった「ハーバード大学附属フォッグ美術館東洋部長のラングドン(ランドン)・ウォーナー博士が、貴重な文化財の宝庫である京都・奈良を空襲対象から外すよう米国政府に進言したため、京都は戦災から守られた」との説は、占領軍の意向を受けたマスコミと美術評論家が生み出した伝説に過ぎなかったという、重要な事実が明らかにされました。京都府庁文書(京都府統計課『戦災による銃後人口の減耗調査一件』)や松原警察署の記録(松原署沿革録『米機爆撃による災害ならびに措置の概況』)など、当時この空襲による被害をまとめた公文書があることも分かりました。多様な人々によるこうした地道な証言・資料収集や実証的な研究により、「京都は文化都市だから戦災を免れた」という通説が、根拠のない思い込みであり、一種の政治神話であったことがはっきりしたのです。敗戦の年、凍てつく1月のある夜に起こった空襲の存在は、戦後の京都復興が進むなかでいったん隠され、幻になりつつありましたが、当時を知る地域住民や研究者、ジャーナリストらの手により、こうして再び白日の下に現れ、京都地域にとっての戦争「被害」の意味を問い直す契機となりました。

しかしさらにそれから20年近く経ち、当時を記憶する人が高齢化しつつある現在、馬町空襲に言及される機会は減り、その記憶は風化しつつあります。こうした現状に対して危機感をもち、「空襲の体験を若い世代に伝えなければならない」と考えた地域住民が、2012年に「馬町爆撃を語り継ぐ会」を発足させ、2年後の1月16日に修道国民学校のあった場所に記念碑を建てたのです。昨年の調査では、本学の学生・大学院生らが、碑を建てられた住民の皆さんに対して、空襲の体験を今後どのように残し、伝えていきたいか、思いを伺いました。その際に住民の皆さんが異口同音に言われた、「発信源や背景がはっきりしない情報を受信者に無批判に鵜呑みにしてはならない」、「思ったことが自由に発言できる時代のかげがえなさ」等の重い言葉は、若い世代にとくに強い印象を残したようです。

戦後生まれの世代が総人口の8割を占めるに至った日本社会で、リアリティを欠いた戦争論が蔓延し、一般市民への情報統制が強まる現状をみると、かつて無差別爆撃にさらされた人々の声を聴き、戦争への想像力を高めていくことが今こそ必要だと、改めて思っています。

《国家安全保障戦略の精神》と《平和ミュージアムのこころ》とのはざままで

立命館大学国際平和ミュージアム

運営委員 植松 健一

(立命館大学法学部教授)

■ となりの予備自衛官補

「予備自衛官補」制度——自衛官未経験者を対象として、防衛大臣の教育訓練召集命令に基づき、年50日を越えない範囲で「予備自衛官として必要な知識及び技能を修得させるための」教育訓練を受けた上で、予備自衛官への任官を認める制度（自衛隊法75条の9～11）であり、その目的は「防衛基盤の育成・拡大」（『平成26年度防衛白書』345頁）にある。

現下の学生にとって、この予備自衛官補という身分は、ある種のステータスらしい。あくまで私が直接に接する範囲の学生たちから得た印象だから一般化するつもりはないが、そう感じる。今年度についていえば、私の専門演習（ゼミ）の学生で2名が予備自衛官補の訓練を受けている。それとは別に憲法の講義の受講生にも予備自衛官補がいる。私が単年度で顔と名前が一致する学部（法学部）の学生は前後期4つの小集団クラス合計100人程度、プラス2つの大講義科目を前列で聴講したり、授業後に質問をくれるので少なくとも顔は認識している学生が計30名程度といったところだろう。その中で3名という数は少なくない数だ。彼らは周囲から「変わり者」扱いなどされはしない。むしろ、コンパの席で予備自衛官補になったとことを誇らしげに語り、周囲も部活でインカレの全国大会出場が決まった選手に向けたような賞賛の反応を返している。

教壇に立ち14年を越えるが、その間に進路として自衛官になった卒業生もいるにはいるが、予備自衛官補の学生という類型を見かけるようになったのは、ここ2、3年のことだ。彼らは年数日の訓練の後、予備自衛官になることを目指しているが、将来の志望が自衛官というわけでもなさそうで、予備自衛官補の体験が就職活動の際の「有利な話題」になると考えている君もいる。なるほど、予備自衛官補ないし予備自衛官の身分は、厳しい規律を修得し体力もある人物だと国が証明するようなものであるから、企業にとっても、中途半端な学生サークルの体験を面接で語る学生よりは、期待できる人材なのかもしれない。また別の学生は、もともとミリタリー的な趣味があり、「社会貢献」ができると同時に、訓練で日当がもらえるのだから、体育会の合宿よりも割が良いのだと語ってくれた。そ

んな彼らの話をコンパの席で聞く私は、自分の好きなことに打ち込める「若さ」の特権へのうらやましさとともに、上手く言語化のできない違和感も覚える。彼らは、法律学もよく勉強し、授業にも真面目に出ている（訓練日と授業日が重なるので、教育実習などと同じく公欠扱いにしてほしいと愚痴をこぼしていた）。ゼミでの討論でも、憲法感覚（つまり人権保障と権力の制約という立憲主義の精神）に充ちたセンスの良い発言をしてくれる。彼らの中で、自衛官という職業と、憲法の学習は、なんの矛盾もなく両立するのである。

もちろん、現在の自衛隊は多様な任務を果たしており、必ずしも「軍」の側面ばかりの組織ではない。私たちがテレビでよく目にするのは災害時の遭難者救助や被災地復興作業であり、その献身的な隊員の姿にあらわれるのは理解できる。あるいは専守防衛のための「自衛のための最小限度の実力」と自衛隊を捉えてよいならば、そういう場面で生命を賭しても任務を全うしたいと考えるのも、やはり理解できないわけではない。それゆえ、彼らの行動原理を全否定しようとは思わない。だがしかし、昨年7月以降、政府は集団的自衛権の一部行使も合憲だと言い始めた。この現実を、彼らはどう考えるのか。今や他国防衛のために自衛隊が武力を行使したり、他国の軍隊の支援のために中東だろうとどこだろうと自衛隊が兵站活動をすることが可能になろうとしている。こうした自衛隊のフル・スペックの「軍」への昇格と、予備自衛官補という「ハードルの低い」自衛官の若者意識への普及は、軌道を一に進行しているのである。それが私の違和感の正体なのだろう。

■ それでも「徴兵制」には効用がある？

安保関連法案が強行に制定されようとする中、「海外派兵で戦死者ができれば自衛隊に入る若者が減り、ゆくゆくは徴兵制が敷かれるだろう」という声も出ている。実際、野党の中にはそういう趣旨のポスターやパンフレットをつくろうという動きもみられる。しかしこういう議論に対しては、「現在のハイテク兵器は専門的に訓練された職業軍人でなければ扱えないのだから、素人を徴兵するなど軍事的にも経済的にも非効率・

不経済であって、ありえない」という「お決まり」の反論がある。安倍首相も国会答弁などで「徴兵制復活などレッテル張りだ。徴兵制は憲法で禁止されている」と繰り返し答弁してきた。

では、徴兵制復活論者は、ありもしないことを煽っているだけなのだろうか。そうともいえないのではないか。「憲法で禁止されている」という首相の言は、その内閣が「集団的自衛権は憲法上許されない」という歴代の政府解釈を簡単に変更してしまったのだから説得力がないが、なるほど、「徴兵制は非効率・不経済」というのは正しい認識なのかもしれない。しかし、徴兵制の効用とは、単に軍事的合理性や財政的効率性だけで評しうるものでもないだろう。2011年に停止するまでドイツ連邦共和国は徴兵制を採用してきたが、もし徴兵制が非効率で不合理ならば、合理性・効率性が大好きなドイツ人は、とっくの昔に（少なくとも東西冷戦後は）徴兵制を廃止していたはずである。現在も徴兵制を維持する韓国にせよイスラエルにせよ——前者は分断国家であり、後者は近隣国から承認も歓迎もされていない人工国家である——国民皆兵という理念は、「国の正統性」や「国民アイデンティティ」と直結しており、だからこそ効率性を犠牲にしても維持されているのである。男女皆兵を採るイスラエルについて報じた新聞記事によれば、男性3年・女性2年の軍隊生活を経験するかの国の若者たちは、大人としての成熟が早い一方、自国への危機意識を植え付けられることで、イスラエル批判に耳を貸さない保守的な大人になりがちだという（「軍隊がイスラエル人を大人にする」朝日新聞社グローブ2015年7月5日号）。そのような機能を徴兵制が持っているとするれば、軍事的・経済的に非効率・不経済でも、徴兵制を採用する日が日本に永久に訪れないと言い切れようか？ 近時の企業における社員研修の一環としての、自衛隊体験入隊などの動きとも連動して、まったく非現実な想定とは私には思えない。

以上のことに留意しつつ、2013年に改定された防衛大綱を読み直すと、そこに「社会の少子化・高学歴化に伴う募集環境の悪化を踏まえ、自衛隊が就職対象として広く意識されるよう、多様な募集施策を推進する」という気がかりな一文を発見する。さらに、2013年12月に閣議決定された「国家安全保障戦略」においては、「国家安全保障を支える国内基盤の強化」という項目の下で、「我が国と郷土を愛する心を養うとともに、領土・主権に関する問題等の安全保障分野に関する啓発や自衛隊、在日米軍等の活動の現状への

理解を広げる取組」の推進が掲げられている。しかも、「知的基盤の強化 国家安全保障に関する国民的な議論の充実や質の高い政策立案に寄与するため、関係省庁職員の派遣等による高等教育機関における安全保障教育の拡充・高度化、実践的な研究の実施等を図る」のだという。要は、①少子化を踏まえて多様な手法で自衛官をリクルートすること、②そのための精神的基盤の強化として愛国心の涵養や自衛隊への理解を深めること、さらに、③大学での「安全保障教育の拡充・高度化」をはかること、などを施策として国は重視しているのである。文科大臣による国立大学への「国旗斉唱・国歌掲揚」の「お願い」もこうした流れの延長線上にあるのかと邪推したくもなるが、とにかく、大学生は自衛官の人材の宝庫であると防衛省が目をつけていることは確かである。

もちろん、より現実的なオプションは、アメリカのような事実上の「経済的徴兵制」の方向（堤未果『ルポ貧困大国アメリカ』岩波新書第5章参照）なのであろう。こちら、日本における格差・貧困の深刻化の下では、十分にリアリティがある。

■ 国際平和ミュージアムのある大学として

さて、2012年の着任以降、私は1回生の基礎演習の時間を利用して国際平和ミュージアム見学を毎年実施してきた。今年度は法学部の基礎演習クラスのほとんどが、サブゼミ・アワーを利用した平和ミュージアム見学を実施しているようである。戦争の「リアリティ」の一端を教えてくれる展示品も重要だが、戦時体験を持つガイドさんたちの生の交流自体が、学生にとっては貴重だと思う。立命館大学において予備自衛官補に志願する学生たちは、そこでの訓練を通じて（イスラエルの記事が日本にも妥当するとすれば）「自国の危機意識」を育んでいく。それは、いわば、前述の《国家安全保障戦略の精神》とでもいうべきものである。しかし、同時に、教学理念「平和と民主主義」を掲げる大学として、その理念を体現する《平和ミュージアムのこころ》というべき様々な考えや知識も身につけていくはずである。すなわち、彼・彼女たちは、《平和ミュージアムのこころ》と、《国家安全保障戦略の精神》という二つの波を、同時に知的形成・人格形成のシャワーとして浴びていくことになる。そうした現実を直視しながら、学生にどう向き合っていくか。憲法を教える教育者としての私の課題である。

『アンネのバラ—40年間つないできた平和のバトン—』

國森康弘 著（講談社 2015年5月）

立命館大学国際平和ミュージアム

運営委員 金森 絵里

（立命館大学経営学部教授）



平和ミュージアムの玄関先の植え込みには「アンネのバラ」があります。「アンネ」とは、第二次世界大戦中の1945年にナチス・ドイツの強制収容所で、15歳の若さで命を落としたユダヤ人の少女ア

ンネ・フランクです。1942年7月から1944年8月までの2年余り、13歳から15歳までを、ナチスのユダヤ人狩りから逃れるためにアムステルダム の隠れ家で暮らしました。アンネ一家を含め8人のユダヤ人が密室で過ごす、窮屈で不安な生活のなかでつづられた『アンネの日記』は、2009年に世界記憶遺産に登録されました。

8人のなかでただ一人戦後まで生き延びたアンネの父オットー氏は、1959年にベルギーのバラ育種家ヒッポリテ・デルフォルヘ氏と出会いました。デルフォルヘ氏は、交配によって8年がかりで生み出した、もっとも美しいバラに「Souvenir d' Anne Frank」ー「アンネ・フランクの形見」と名付けて、オットー氏に贈りました。

日本にアンネのバラが最初に贈られたのは1972年のことでした。聖イエス会黎明（しのめ）合唱団がイスラエルへの演奏旅行中にたまたまオットー氏に会い、その後深い親交を結んだ縁によるものでした。アンネのバラの苗木10株が送られますが、うち9株は枯れてしまい、かろうじて1株のみが大槻道子牧師の家の庭に根付きました。1976年、オットー氏より2度目の苗木10株が贈られました。3株は大槻牧師の庭に、3株が東京都杉並区の高井戸（たかいど）中学校に送られました。また大槻牧師の親戚であり、京都府綾部市の元高校教諭、山室隆一氏にも1株が託されました。

山室氏はかつて教師として教え子を戦地に送り出したことへの悔いから、アンネのバラを接ぎ木で増やし全国に広める志を立てました。1982年頃より山室氏はアンネと同世代の全国の中学生に平和を訴えようと、八田小学校（綾部市）を第一号に、中丹地区（綾部・福知山・舞鶴）の20余校に贈り届けました。1983年、京都市の全中学校に呼びかけますが、反応があったのはわずか3校だけだったとき、山室氏は以下のように書きました。「今、中学校はそんなことには関わっておられない状態であることは十分察しられはしますが、……

アンネの平和の祈りのこもったバラを育て、静かに平和を考えるのも、効果は遅くともいいのではないのでしょうか」。1987年にがん倒れた山室氏の遺志を継いだのは三男の建治氏でした。建治氏は高校教諭としての仕事の傍ら毎年200本の接ぎ木をおこないました。バラを希望する全国の人たちに山室親子が送り出した苗木の数は、36年間で7,915本にのぼります。

1992年、国際平和ミュージアムの開設に合わせ、そのうちの1本がミュージアム玄関前に株分けされました。建治氏は、定年後、立命館大学大学院国際関係研究科に入学し、安斎育郎ゼミに所属して修士論文「平和教育におけるアンネのバラ普及運動の役割」をまとめました。

國森康弘著『アンネのバラ—40年間つないできた平和のバトン—』は、オットー氏から送られた2度目の苗木のうちの3本が贈られた高井戸中学校のアンネのバラの現在のすがたを追った写真絵本です。つぼみは深紅、花が開くと黄金色、やがて薄桃色にうつろい、また紅に変わるアンネのバラの美しい写真とともに、40年間バラを守り続けてきた中学生・保護者・地域の人々のすがたを追っています。1974年、国語の授業で、生徒たちはアンネへの手紙をまとめた文集『暗い炎の後に』を作成し、オットー氏に贈りました。オットー氏に文集が届いたころ、生徒たちの間から「アンネのバラを育てたい」という声があがり、その思いがオットー氏に伝えられ、苗木が送られてきたのです。バラの栽培は難しく、40年の間に何度も枯れそうになりました。それを、愛媛県の園芸家、相原嘉寿雄氏の協力のもと、高井戸中学校の生徒、職員、保護者と地域の人々が祈るように育て続け、今では160株ほどに増えました。

本書の最大のメッセージは、バラはあたりまえにあるのではないということです。枯れないように手を入れ続け、守り続けていかなければ、すぐに咲かなくなるのです。本書は戦後70年の節目を迎える今日の私たち（老若男女を問わず）の必読書の一つであると、推薦者は確信しています。本書は、アンネというユダヤ人の悲劇にとどまらず、今のパレスチナ地域におけるユダヤ人による攻撃、日本人の原爆被害だけでなく、アジアでの加害についても触れ、「加害と被害、善と悪……と、単純に線を引けるわけではありません」としたうえで、「この本を手にとったあなたには、何ができるでしょうか」と問いかけています。再び戦争への扉を開けつつある今日、その問いに私たちは真剣に向き合わなければなりません。國森氏自身の回答は、ぜひ、本書を手にとって確認していただきたいです。

開催報告 (2015年2月～6月)

第91回 第20回京都ミュージアムロード参加企画 京都・大学ミュージアム連携 立命館大学×京都外国語大学 学生コラボ企画展 「心の声～みて、感じて、考える～」

会期：2015年2月7日(土)～3月29日(日)
主催：立命館大学国際平和ミュージアム
京都外国語大学国際文化資料館
協力：京都・大学ミュージアム連携
企画：[立命館大学] 川端麻友美、篠原晴香
坂野百合子、大竹伶奈、橋詰華奈
山本心、井澤仁志
[京都外国語大学] 高菅涼子、小林実香
深石めぐみ、鈴木拓也、来住野優介

会期中、関連企画として二つのイベントを開催しました。(コラボ展の詳細はP12をご覧ください)

◆「学生による展示解説」

日時：2015年2月7日(土)
①13:00～13:30 ②14:00～14:30
場所：ミニ企画展示室

◆「戦時下のレコード鑑賞会」(企画:国際平和ミュージアム)

日時：2015年2月7日(土)、2月8日(日)
①13:30～14:00 ②14:30～15:00
場所：国際平和ミュージアム中野記念ホール
内容：戦時中のレコード曲(9曲)の鑑賞。当時の蓄音機の展示。



学芸員の解説とレコードに聴き入る参加者の方々

第92回 「医の倫理 一過去・現在・未来— ～日本医学会総会2015関西に向けて」

会期：2015年4月2日(木)～4月14日(火)
主催：同展企画実行委員会
共催：立命館大学国際平和ミュージアム

戦時中に日本の医学者・医師がおこなった「人体実験」「生体解剖」などの「医学犯罪」を、史実にそって検証する展示をおこないました。京都での日本医学会総会開催にあわせ、医療関係者や弁護士らでつくる実行委員会が企画しました。会場には細菌



教科書ではあまり触れられることのない史実が紹介された。

今号では2015年2月から6月の間に開催したミニ企画展示をご紹介します。

第93回 「絶望の島から希望の島へ「クリオン島」 —ハンセン病と差別の中に生きる人々—

会期：2015年4月19日(日)～5月24日(日)
主催：Messenger Culion 金原 遥
(立命館大学産業社会学部4回生)
共催：立命館大学国際平和ミュージアム

「皆さんは「ハンセン病」をご存知ですか？」来館者への問いかけから始まる本展は、かつて世界最大のハンセン病患者隔離施設のあったクリオン島の存在を紹介すると同時に、ハンセン病に対する正しい情報を伝え、差別や人権問題について考えてもらいたいと本学産業社会学部4回生金原遥さんが企画しました。

クリオン島は、フィリピンの南西に位置する美しい海に囲まれた人口約2万人の島です。この島は、アメリカ統治下の1906年ハンセン病拡大防止の目的で隔離島に指定され、1964年に隔離政策が終了するまで、人権を無視した処遇がとられていたことから「絶望の島」と呼ばれることもありました。



会場の様子

展示は、クリオン島の概要やハンセン病隔離島としての歴史、ハンセン病についてフィリピン、日本の政策を中心に紹介し、ハンセン病のこれからを考える内容となりました。展示された31枚の写真はすべて金原さんが現地で撮影したものです。

金原さんは、クリオン島で出会った人々が持つ悲しい過去を背負いながらもたくましく、明るく、前向きに生きる力に希望を感じ、本展タイトルを「絶望の島から希望の島へ」としたそうです。その言葉通り、展示された写真には人々の笑顔があふれ、自然豊かな島の風景を見ることができました。



企画者の金原 遥さん

本展は、9月28日(月)～12月24日(木)に、本学大阪いばらきキャンパスでの巡回展を予定しております。こちらをご覧ください。

※第94回ミニ企画展示「日本平和博物館会議 戦後70年共同展示」については、P.16上段をご覧ください。

京都・大学ミュージアム連携 立命館大学×京都外国語大学 学生コラボ企画展

紙の文化博物館
中川 智 絵

(前 京都外国語大学非常勤講師)

はじまり

立命館大学国際平和ミュージアムと京都外国語大学国際文化資料館が合同で、両大学の学生によるコラボ企画展示を行うことになったのは「京都・大学ミュージアム連携」で合同展覧会を行ったことがきっかけでした。2011年度から始まった「京都・大学ミュージアム連携」の中で、ともに教学、建学の理念に「平和」を掲げる両大学が、大学ミュージアムとして学生を主体とした取り組みを考える中で、学生の交流と博物館の協働をめざしてこの企画をスタートさせました。

実現に向けて

本企画は2014年の4月、学生が主体となる展示であること、展示テーマを「平和」とし、両館の収蔵品を用いることを条件として、両館で活動する学生を対象に企画学生を募集するところから始まりました。立命館大学からは7名、京都外国語大学からは5名の学生がこの企画に参加しています。

学生達は6月8日に第1回目の企画会議を行ってから約8ヶ月をかけて立案段階から展示を立ち上げ、討議を重ねながら企画を進めていきました。多忙な学生生活の中で時間をやりくりして会議を行い、会えない時はSNSを駆使して検討を重ね、タイトルや展示構成を決定しました。



企画会議の様子

展覧会タイトルの「心の声～みて、感じて、考える～」には、学生達が資料に向き合い、調査をする中で感じた平和をもたらす重要な要素が表されています。

そして展示へ

平和を考える中で学生達は、「攻撃」「寛容」「心を開く」「思いやり」「緊張」という5つのキーワードを設定し、展示はこれらのキーワードに沿って両学の収

蔵品を掛け合わせる形で構成されました。

背景も収集の過程も異なる資料を掛け合わせて一つの展覧会とすることは、資料の持つ多様な側面を浮かび上がらせ、来館者が「感じて」「考える」きっかけを提供する展示となりました。

広報や展示解説など展覧会に付随する事業も学生達自身が手がけました。

展覧会を通して

この展覧会を通して学生達は、学ぶ場も、専攻も全く異なる自分達の手で、ひとつのテーマをもって調査を行い、展示を作り上げるプロセスを体験しました。このことは平和についての認識を深めるだけでなく、社会における協働を学ぶ場となりました。

サポートしてくださった立命館大学国際平和ミュージアムスタッフの皆様へ感謝申し上げるとともに、今回の取り組みを、大学ミュージアムならではの学びの可能性として提案したいと思います。



ギャラリートーク

企画学生の感想

- 私は日本の戦争から平和を考えることができるのではないかと考えていました。しかし、京都外国語大学の皆さんは、世界各地の民族資料から平和を考えようとしていました。両大学のコンセプトが「平和」とはいえ、お互いの「平和」に対する捉え方が異なることは展示の際に課題でありました。しかし、この課題を両大学が力を合わせて乗り切った時、大変嬉しさを感じました。

(立命館大学 井澤仁志)

- 平和の価値観について考えさせられました。人の幸せや苦しみは共通している部分があるのだと思いました。また一方で価値観は誰もが同じわけではなく、押し付けてはいけないものだとも感じました。このような言葉で表現することが難しい部分を、今回の展示で上手く形にできたと思いました。

(京都外国語大学 鈴木拓也)

平和とスポーツの写真展

大阪成蹊大学教育学部准教授

赤 沢 真 世

(前 立命館大学スポーツ健康科学部准教授)

2015年3月17日(火)から26日(木)、びわこ・くさつキャンパスのインテグレーションコア1階ロビーにて、「スポーツと平和の写真展」を開催しました。この写真展は、ロンドンオリンピック(2012)を前に、イギリスのコベントリー大学の平和センター、和解の研究に携わる教員や学生によってプロデュースされ、イギリスのブラッドフォード平和博物館の共催のもと、2011年10月4日に開催されたものです。国際平和ミュージアムを持つ立命館大学で、とりわけスポーツ・健康を学ぶ学生にこそ、こうした写真展を通してスポーツが持つ平和創造の可能性を考える機会を持ってほしいという思いがありました。展示では、英語のパネルに加えて、



展示の様子

枝寛康さん、2回生の宇津木遥さんが日本語訳を作成し、必要な解説も添えて展示しました。「スポーツ・健康を学ぶ私たちこそが、スポーツのもつ平和創造の力についても深く考えることが必要だと改めて感じた」、「こうした歴史を知ることが大切である」というご意見・感想を寄せていただきました。ご覧になった方々が各々に考えを深める一助になったことを嬉しく思います。



パネル翻訳・展示担当の学生とともに(左から白枝さん、筆者、池井、宇津木さん)

インターンシップ受け入れ

2015年3月24日(火)～4月1日(水)にかけて、インターンシップ生の受入れを行いました。今回のインターンシップ生アンドレ・ソルフさん(ミュンヘン大学大学院在学・大阪大学交換留学生)は、歴史認識や博物館展示に関心を持ち、これまでに遊就館などを訪れて平和博物館との比較調査を行った経験もある大学院生です。インターンシップ事業として期間中に、ドイツ語チラシ製作や、ドイツ語のウィキペディア書き込みなどを担当してもらいました。また、当館の地階常設展示「世界の教科書比較」コーナーのドイツ語教科書更新にも携わっています。4月1日には、インターンシップ報告会と修了証書授与が行われました。



プレゼンテーションの様子

インターンシップ生の感想

私の名前はAndré Solfです。去年の9月から大阪大学で交換留学生をしています。冬に大阪大学の講座で京都へ団体研修旅行をしている時、初めて立命館大学国際平和ミュージアムを見に行きました。私はこの博物館の展示の理念が興味深いと思いましたので、インターンシップをすることが可能かどうか尋ねました。

担当の先生とミュージアムの責任者のおかげで一週間インターンシップすることを受け入れてもらえました。最初の任務は常設展示のチラシをドイツ語に訳することでした。この任務の間に私は展示をよりよく理解することができ、国際平和ミュージアムの理念を理解することができました。私はほぼ日本語を話さないのですが、みなさんが助けてくれて、とても親切にいただきました。このインターンシップの後にも、展示の一部に関するプロジェクトに参加することに興味があるかどうかもたずねていただきました。

みなさんにお礼を言うのと同時に、今後もインターンシップ受け入れがあればいいと思います。

(インターンシップ生 アンドレ・ソルフ)

戦後70年平和企画

山本宗補写真展「戦後はまだ…刻まれた加害と被害の記憶」

会 期：2015年5月3日(日)～7月4日(土)

会 場：立命館大学国際平和ミュージアム1階・中野記念ホール

参 観 者：9,692名

主 催：立命館大学国際平和ミュージアム

後 援：京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会、京都市内博物館施設連絡協議会、KBS京都
朝日新聞社、京都新聞、毎日新聞社、読売新聞社

戦争体験者らの取材を続けるフォトジャーナリスト山本宗補^{むねすけ}が、日本や中国など国内外の戦争体験者70名に取材した写真展を開催しました。展示は「満州・中国・シベリア」「東南アジア」「南洋・沖縄」「本土・空襲・被爆者」の4部構成で、出征、シベリア抑留、生体解剖、空襲、慰安婦等の戦争体験を語られた70名の肖像写真と証言が並べられました。戦後70年を迎え、戦争がもたらした負の歴史との対峙を観る者に否応なく促した本展は、今を生きる戦後世代の胸に深く刻まれるものとなりました。



展示会場の様子

来館者の感想

●戦後70年の節目を迎えるとともに、戦争体験者が日々減っていることに危機意識を感じた。私が大学で学んでいる歴史学はどうしても史料を通して過去の出来事を考えなければならない。そのためあまり歴史にリアリティーを感じることができない。それに対して今回の展示は戦争体験者の貴重な経験を伝えてくれるものであり、当時のことを肌身をもって感じることができたような気がする。日々の日常は何気なく過ぎていき、「戦争」という記憶も少しずつ忘れられていってしまう。「平和」を深く考えることは今日ますます重要になってきている。そのようなことを伝えてくれる展示でした。
(京都市内 20代 学生)

●高校歴史教育で、どこまで15年戦争を扱うことが出来るだろうか。圧倒的に足りない授業時間の中で、困難な課題を日本中の高校教員が抱えている。また、政治家や圧力団体が高校の授業内容に踏み込み、担当教員を祭り上げる事件が実際に起きている。良心を持って「戦争の被害と加害」を教える教員が排除されている。どうすればこのような現状を変えられるのだろうか。困難な課題を共に乗り越えてゆく一歩一歩が大切になる。今回の展示はそのような多くの「良心」を勇気づけるものだ。

(京都市内 30代 教育関係者)



山本宗補講演会 & ギャラリートーク

「戦後世代の私が、なぜ戦争体験者の証言を伝えたいのか？」

日 時：2015年5月3日(日)

[講演会] 13:30～14:40 / [ギャラリートーク] 15:00～15:30

会 場：国際平和ミュージアム2階会議室／展示会場内

参加者：50名／45名



ギャラリートークで写真を前に語る山本氏

開幕初日には山本氏を迎えて講演会とギャラリートークを開催しました。日本国憲法施行から68年目のこの日、山本氏は講演会の冒頭で憲法9条を守る意義を語りました。また2011年の震災と今も続く原発事故の被害にふれ、戦争についても、人災としての被害の大きさと過去の教訓をきちんととらえ、正しく伝えることが必要だと訴えました。山本氏がなぜ戦争体験者への取材を始めるようになったのか、ご自身の過去にふれつつ、日本軍による戦地での数々の加害行為や飢餓、戦病死、また国内での大空襲や原爆による被害についてプロジェクターを使って紹介しました。参加者の「重い口を開いてもらうことは難しいと思うが、

どのように証言を引き出しているのか」との質問に、山本氏は「残りの人生の短さを思い、話しておきたい気持ちが強いと思う。本当は話したかったが、自分の娘や息子には言えない。ちょうどその世代の自分には話し易いということがあったのではないかと答えられました。引き続き展示会場にてギャラリートークがおこなわれ、写真を前に山本氏は証言者の体験を説明し、戦争の本質について語りました。参加者の中にはシベリア抑留の体験を持つ方もおられ、取材さながらのお二人の対話に他の参加者も静かに耳を傾けておられました。

林博史講演会 & ギャラリートーク 「加害と被害の重層構造—日本人の戦争体験をとらえ直す」

日 時：2015年5月30日(土)

〔講演会〕 13：30～15：30／〔ギャラリートーク〕 15：45～16：30

会 場：国際平和ミュージアム2階会議室／展示会場内

講 師：林博史氏（関東学院大学教授 現代史）／山本宗補氏

参加者：47名／30名



加害と被害の重層構造について語る林氏

5月30日には林博史氏を迎えて講演会を開催しました。現代史がご専門で日本軍による加害についても多数の著書がある林氏は、1980年代に若手研究者としてマレー半島における日本軍の虐殺事件を調査し、その被害者と虐殺の実行部隊を送り出した広島^{ひろしま}の被爆者の交流に立ち会うという機会を得ました。その中で被害と加害が重層構造であることや、日本側の加害の捉え方により、日本の被害に対する外からの認識も変わることなどを深く受けとめられたご自身の経験からお話を始められました。そして、帝国主義と植民地戦争の歴史の中での日本の特異性や、1920年代から30年代にかけての軍隊内での人権意識の変化など触れながら、日本人の戦争加害と被害を生み出した歴史的背景について説明されました。また、戦後こうした課題に

向き合う際に「戦争」に責任転嫁をして、個人の具体的な責任を問わなかった日本の問題点も指摘され、こうした課題に向き合うためにも、徹底して個人の体験に向き合う山本さんの作品の重要性を強調されました。最後に、自らの過ちを認識し、反省することは、未来を作る力になるとの言葉で講演を結ばれました。

参加者からは「加害と被害の実態を考えていくためには、近現代史を学ぶことが必要だと思った。」「戦争を理解する際に、被害者を中心にするだけでは、「被害」（への理解）を軽視してしまうと感じた。」などの感想が寄せられました。

また、講演会の後には展示会場にて、山本宗補氏によるギャラリートークもおこなわれました。

山本宗補ギャラリートーク

日 時：2015年6月16日(火) 14：00～15：00

会 場：展示会場内

参加者：41名

山本氏のご厚意により、急遽、3回目のギャラリートークを開催しました。開催当日のお知らせとなったにも関わらず、多くの方にご参加いただきました。



「福島菊次郎」(2011年)の前で語る山本氏

5月3日(日) 参加者の感想

- 今の安倍政権が改めて怖いと思った。今、日本だけではなく、ヨーロッパでも移民排斥運動が広がるなど、世界全体が平和から遠のいているように思えてしまう。このタイミングで私たち戦後の世代が次世代だけではなく、今の世代の中でも日本の加害行為、当時の政府と天皇制について共有していくことの重大さを改めて感じた。(京都府 20代 学生)
- 友人が3月下旬に福島へ行き、山本さんに会ったようで、この写真展を勧めていただきました。そうでなければ知らなかったし、来ていなかったと思います。その友人の彼女は原発問題に取り組んでいましたが、ひとつの問題に取り組むと、国家に関わる様々な問題に到りつくようです。今の原発再稼働など様々な問題などを聞き国は何も変わっていないと思いますが、人は学んでできていると信じたいです。(京都府 20代 学生)

5月30日(土) 参加者の感想

- 事実から目をそむける事が何よりも危険なことだと思いました。また、加害をただ批判するだけでなく、その責任を考え、何故加害者になったのか、その原因を正確に理解、追究した上で、未来に希望を持ちたいと思いました。(大阪府 20代 会社員)
- 第二次世界大戦を振り返るとコンプレックスと差別意識や政治状況など戦後70年経っても解決できてないことだらけで危機感を覚えます。戦争に対しての考え方だけではなく社会の様々な側面で加害と被害の重層構造や反省のなさを感じます。例えば、日本が死刑を認めていることも、犯罪をおかすにいたった背景を社会全体で理解して解決に向けて取り上げて考えるのではなく、死で問題を解決しているかのように見せかけている。問題を直視せずにいるところは戦争の歴史の振り返り方と似ていると思いました。これからも学び考えていきます。ありがとうございました。(和歌山県 20代 教職員)

※感想は会期中寄せられたアンケートに則って掲載しています。

■戦後70年平和企画 第94回ミニ企画展示 「日本平和博物館会議戦後70年共同展示」

会 期：2015年6月3日(水)～6月24日(水)

共同企画：日本平和博物館会議各館

埼玉ピースミュージアム(埼玉県平和資料館)

川崎市平和館

あーすぷらざ(神奈川県立地球市民かながわプラザ)

ピースおおさか(大阪国際平和センター)

広島平和記念資料館

長崎原爆資料館

対馬丸記念館

ひめゆり平和祈念資料館

沖縄県平和祈念資料館

2015年は、東京や大阪などへの無差別都市空襲や沖縄での壮絶な地上戦、そして、人類史上初の広島・長崎の原爆被災の果てに、第二次世界大戦が終結して70年目に当たります。300万人をこえる日本人が命を失い、世界ではおよそ5,000万人が犠牲になりました。しかし、戦争や原爆についての正確な知識をもつ人の割合は年々少なくなっており、今から15年前のNHKの世論調査でも、「広島原爆の日」を知っている若者は25%、全世代を通じての正答率も27%でした(『放送研究と調査』、2009年)。1994年に結成された

「日本平和博物館会議」は、戦争や核兵器について考える節目となる今年、各館の紹介やアピールなどを伝える共同パネル展を開催することとなりました。

パネルは4月～5月にかけて当館にて制作しました。前向きな気持ちで見ていただけるよう、明るい色使いでまとめ、それぞれの館の趣旨やそれを踏まえた活動の特徴を打ち出させていただきました。各館への巡回のかわきりとなった当館の展示を訪れた見学者からは、「地元にも平和博物館があることを知り、行ってみようと思いました。」などの感想が寄せられました。今後、各地での開催により戦争の記憶を継承して平和について考えるための施設について、より多くの方に知っていただくとともに、来館者がそれぞれの館を訪れる機会となることが期待されます。



展示会場の様子

「生き方探求・チャレンジ体験」 ～京都市立上京中学校2年生1名を受け入れ～

2015年6月9日(火)から11日(木)まで、京都市教育委員会主催による「生き方探求・チャレンジ体験」推進事業の一環で、京都市立上京中学校2年生1名を受け入れました。

当館の職業体験では、直接来館者に接する受付業務と展示解説を中心におこないました。開館準備作業や図書配架作業、チケット整理やアンケートの入力などの作業も熱心に取り組んでいました。「平和へのメッセージ」の貼り替え作業では学生ミュージアムスタッフとともに、きれいに書けたものだけでなく、平和についての思いがしっかり書かれているものを考えながら選び掲示していました。

また、2階常設展「京都平和史跡めぐり」の梅小路蒸気機関車館について、来館者に解説することを課題としました。備え付けの解説文だけでなく、地階常設展で関連する展示資料を見て説明用原稿をつくるなど、広く・深く学ぶことの大切さを考えているようでした。学生ミュージアムスタッフやボランティアガイドのみなさんから話し方についてアドバイスを受け、

相手に合わせてわかりやすい言葉を選ぶなど工夫もしていました。展示解説を聞いていただいた来館者からお礼の言葉をかけてもらい、やりがいと自信を得たようです。

こうした体験や交流から、博物館業務にもいろいろな部分があることを発見し、当館が伝える「平和とは何か」ということについても学ぶことができたと思います。



京都平和史跡めぐりコーナーで展示解説の仕事体験

2015年度 第1回NGOワークショップ

「あなたのお金どこへ行く？～私たちができる平和創造のための出資～」

日 時：2015年6月19日(金) 16:20～17:50

場 所：国際平和ミュージアム2階会議室

講 師：田中 優 氏

(未来バンク事業組合 理事長)

対 象：大学生、大学院生

参加者：24名

企 画：リーダー・河田麻実(文3)、渡邊智香(産社3)、
田中志穂(国関3)、古田里奈(文2)、友野考佑(法2)

例年ミュージアムでは、2階展示室のナビ業務に携わる学生ミュージアムスタッフの企画によるNGOワークショップを実施しています。今年度は未来バンク事業組合より田中優氏を講師に迎え、「戦争経済」「戦争につながらない融資」をテーマにワークショップをおこないました。

導入では、講師が「戦争を支えるしくみ」や、環境事業・福祉事業・市民事業に低金利で融資をおこなう未来バンクの事業について、実際のデータに基づいたプレゼンテーションをおこないました。続いて「社会

を戦争に向けないために、どんな起業をして未来バンクから融資を受けたいか」という講師の問いかけに、参加者から「食べ物」「貧困」「市民交流」「震災復興」の4つのテーマが上がり、それぞれのグループに分かれてディスカッションをしました。その後、各グループともユニークな事業発表をおこない、講師からは実践に即した講評がありました。興味深い講義内容とともに大変充実したワークショップとなりました。

企画した学生たちは、準備から当日の運営に当たる中で多くのことを学びました。この経験が今後のミュージアムスタッフとしての活動に活かされるとともに、より多くの学生スタッフにこうした積極的な取り組みを期待したいと思います。



内容を発表する学生と、講評する田中氏(左端) 田中氏(前列中央)と参加した学生たち

戦後70年平和企画

夏休み親子企画「へいわ」ってなに??2015を開催

7月26日(日)、立命館大学国際平和ミュージアムで、親子企画「へいわ」ってなに??2015を開催しました。「戦後70年」の親子企画は、平和のための京都の戦争展実行委員会と協力した「コラボ企画」とし、約90人が参加しました。演劇やDVD上映会といった文化イベント、夏休み応援企画など多彩な催しを組み合わせ、親子連れで参加し一緒に平和を考える時間を過ごしてもらえるよう工夫しました。

午前中は夏休み応援企画として理科・図工の先生が指導し、磁石や水を使った変わった動きをする工作や木のペンダントなど、それぞれ親子で一緒に作品作りに取り組んでいました。戦争と平和を考える、わかりやすいテーマの紙芝居では、子供たちは熱心に話に聞き入っていました。

午後は中野記念ホールで、岡崎にある京都市動物園の戦時中の実話をもとにした児童劇団やまびこ座の創作劇「どうのはなし2015」が上演され、猛獣の殺処分といった戦争での悲劇が本格的な演劇で繰り広げられました。参加者は臨場感いっぱいの演劇に感動している様子でした。また、太平洋戦争の終戦間近に疎開

先の大分市で、病気のため防空壕に隔離されて、終戦も知らされずに息をひきとった睦子(ムッチャン)という少女の物語の影絵劇をDVDで鑑賞しました。

- ・楽しく遊ぼう夏休み応援企画 理科・図工
- ・やさしくわかる戦争と平和 紙芝居
- ・創作劇「どうのはなし2015」児童劇団やまびこ座
- ・DVD鑑賞「ムッチャンの影絵劇」

平和のための京都の戦争展実行委員会：平和のための京都の戦争展を開催するため府下の市民団体有志で結成されました。毎年8月第1週に、立命館大学平和ミュージアムで平和のための京都の戦争展を開催しています。



紙芝居の様子

図工の様子

ボランティアガイド養成講座修了式

2015年2月に開始した第10回ボランティアガイド養成講座の修了式が、4月11日(土)に開催されました。今回のボランティアガイド養成講座では、24歳から最高齢75歳の21名の受講生の皆さんが修了されました。

修了式では、修了証書授与の後、田中聡国際平和ミュージアム副館長から祝辞がおくられました。安齋名誉館長からはお祝いのメッセージをいただき、修了者ひとりひとりへ手書きの絵手紙もおくられました。

修了式とその後に開催された交流会には、現役のボ

ランティアガイドのみなさんも参加され、ガイド養成講座を修了された皆さんをお祝いするとともに、なごやかな雰囲気での懇談が行われました。ペテランのボランティアガイドの方に対しては、これから行う実地研修や実際のガイド活動にあたっての心構え、経験談を熱心に聞いている修了生の姿も見られました。

修了されたガイド養成講座受講生の皆さんは5月から3か月にわたって実地研修に参加されます。

ボランティアガイドとして登録後、夏から秋にかけて本格的にガイド活動を開始することになります。



ガイド養成講座修了式で祝辞を述べる田中副館長



修了式後の交流会の様子

2014年度 資料・図書などの寄贈者一覧

2014度は、以下の方々から資料や図書などをご寄贈いただきました。
お名前を記し、感謝の意を表します(敬称略・50音順)。

資料

安齋 育郎
池内 一弥
池田 善子
岩佐 宜始
植西 栖子
内田 寛

岡尾 恵市
河部 晋
木田寿二郎
熊野 直人
坂口 千鶴
酒見 亮

清水 末子
杉 佳之介
高島年比古
仲村 和枝
廣瀬平四郎
松本 雅子

宮本 敬子
村岡 穆
元山富士男
守本 ルツ
安田 清一
柳原 功

山崎 喬
山田 夢生

図書

アーサー・ピナード
青木 信博
大竹幾久子
天野 芳子
安齋 育郎
市川はるみ
伊藤 昭
岩井 忠熊

岩城 浩幸
岡田 英樹
笠原芙美子
河部 晋
木田寿二郎
君島 東彦
久保田謙次
熊野 直人

小塚 興治
佐久間暢夫
鮫島 福子
杉野 罔明
杉原 正雄
高橋 幸子
寺内 邦夫
東宮 春生

俊正 和寛
中川 勉
中野 圭子
柳樂 優里
西岡 秀子
廣瀬平四郎
布川 庸子
藤岡 惇

本庄 豊
松尾 豊
宮本 敬子
村橋 嘉信
森松明希子
安高 啓明
山根 和代
団体 111団体

※以上、掲載の許可をいただいた方々につきまして、お名前を掲載いたしました。

大韓民国 ノグンリ平和記念館

立命館大学国際平和ミュージアム

副館長 山根和代

(立命館大学国際関係学部准教授)

■ ノグンリ平和記念館開館の背景

老斤里（ノグンリ）事件は、朝鮮戦争の初期の1950年7月25日から7月29日まで5日間忠清北道永同郡永同邑下加里及び黄澗面老斤里の京釜線鉄道及び双窟一帯で、アメリカ空軍機による空爆とアメリカ第1奇兵師団所属の米兵の機関銃や小銃射撃による無差別攻撃により、何百人もの無実の市民が犠牲にされた事件です。過去50年余りの間遺族たちの粘り強い真実究明活動の結果、2004年「老斤里事件 犠牲者審査及び名誉回復に関する特別法」が制定され、これに基づいてノグンリ平和公園が造られました。この中にノグンリ平和記念館があります。

身元が確認された死者の数だけでも121名、実際の犠牲者は300名を下らないと推定されています。1994年にやっとノグンリの事件が韓国内で知られるようになりました。それは虐殺事件で幼い息子と娘を失った鄭殷溶氏（ノグンリ平和記念館館長のチャン・クドウ博士の父親）が、『我らの苦痛を誰が知ろう』という本を出版されたからです。これがきっかけになってノグンリの虐殺は『ハンギョレ新聞』や『マル』誌など、一部のマスコミで取り扱われるようになりました。1999年9月A P通信は、当時の事情と背景を語る資料を整理し「ノグンリの鉄橋」という記事で事件を報道し、上部の命令で米軍が行った虐殺だという事実を暴露しました。同年10月29日在韓米軍が現地調査を実施し、2002年米国のビル・クリントン大統領は、老斤里事件被害者たちと韓国の国民に遺憾の意を表明した声明文を発表しました。これは韓国とアメリカとの関係史や人権史の面で非常に異例なことでした。すでに老斤里は過去のご傷を乗り越え、国内外共に平和と人権の大切さを認識させる場所として生まれ変わっています。

2004年には事件の犠牲者の名誉を回復する法案が、韓国国会を通過しました。2011年にこの法律に基づいてノグンリ公園が造られました。老斤里双窟橋周辺4万坪あまりの敷地内には、平和記念館、教育館、

慰霊塔、彫刻、展望台、休憩所、思い出の生活史館、来訪者センターなどの施設があります。ノグンリ平和記念館は2012年からノグンリ国際平和財団によって運営されています。そこでは犠牲者の魂を追悼し、人権と平和の促進をしようとして様々な取り組みが行われています。

■ 展示の内容や平和・人権のための活動

常設展示では朝鮮戦争ノグンリ虐殺事件について、そして長い間忘れられていた悲劇がついに世に知られるようになった経過や平和のネットワークなどが展示されています。ノグンリ国際平和財団では様々な国内・国際学術会議やイベントを教育館で開催し、世界平和と人権の促進に寄与しています。

さらに毎年様々な文化活動などを行っています。エッセイコンテスト、海外の学生とのピースキャンプ、ノグンリ平和賞授与式、人権に関する絵画と書道のコンテスト、平和マラソン大会、ノグンリアーカイヴプロジェクト、平和美術展示など、非常に多彩な活動をしています。

2012年8月20-24日国際関係学部桂良太郎教授のもとでピースキャンプを実施し、立命館大学の学生が参加して国際交流を行いました。また2014年9月19-22日ノグンリ平和記念館で国際平和博物館会議が開催され、35カ国200人以上の人々が集って経験やアイディアや心を通わせる大変重要かつ有意義な機会となりました。日本からは約60名が参加し、国際平和博物館会議史上初めて多くの日本人が参加しました。また立命館大学の学生、留学生がピースキャンプに参加（14か国から30名）して国際交流をしました。

また2011年に安斎育郎名誉館長がノグンリ平和人権賞を受賞され、韓国マスコミで大きく報道されました。今年も桂良太郎教授を中心にピースキャンプをする予定で、国際平和ミュージアムとノグンリ平和記念館の交流が活発に続いています。



ノグンリ平和記念館



慰霊塔

「きっかけ展示」の重要性——心に残るガイドをめざして

立命館大学国際平和ミュージアム

ボランティアガイド・平和友の会 田川 淑子

平和ミュージアムの来館者は、小・中・高校生の団体が非常に多く、ボランティア・ガイドもそういう子どもたちが相手です。戦争の時代を知らない子どもたちにガイドするうえで大切なことがあります。知らないことを前提に、子どもにわかる言葉で具体的に話すことです。たくさんある展示のなかで、このような条件にかなうものとして、背囊・陶器製手榴弾・パイナッブル爆弾・ファティーマの時計などの「きっかけ展示」があげられます。きっかけ展示の多くは目につきやすいので、子どもたちは「これは何だろう」と興味を持ってくれます。興味を持つという子どもの主体性を引き出すことで、自ら考えるという学習本来の目的に近づけるのではないかと思います。このような問題意識で、きっかけ展示を用いたガイドについて考えてみたいと思います。

戦争責任のコーナーにある元慰安婦の描いた絵のきっかけ展示は、興味を引きやすいものです。裸で泣いている女性の横に立つ木の幹のなかに人の顔が、根っこの下にはどくろがいくつも描かれています。だれしもこの絵の意味を解いてみたくなります。以下はガイドと子ども（小学生）のやりとりです。

ガイド「この絵は不思議な絵です。女の人が裸で泣いています。木の幹のなかに人の顔が描いてあります」

子ども「どれ？・・・ほんまや」

ガイド「木の幹のなかの人は、男にみえますか、女にみえますか？」

子ども「男」

ガイド「泣いている女の人と木の幹のなかの男の人は、どんな関係でしょうか」

子ども「夫婦」「恋人」・・・

ガイド「夫婦でも恋人でもありません。男の人は兵隊にみえませんか」

子ども「みえる」

ガイド「木の幹のなかの人は日本の兵隊をあらわしています。女の方は日本の兵隊に裸にされて、ひどい目にあわされたのです。この絵を描いたのは、韓国のカンドッキョン（姜徳景）さんです。彼女が若いころに戦争があり、韓国の人も戦争に協力させられました。戦争のころ、今の韓国や北朝鮮という国はありませんでした。どうなっていたのでしょうか」

子ども「・・・」

ガイド「日本の植民地だったのです。それで戦争に協力させられました。カンさんはこの絵にあるように、日本の兵隊に裸にされてひどい目にあわされたのです。こういう人を慰安婦といいます。カンさんは絵が上手だったので、

絵で慰安婦がどんなものかを知ってもらおうとしました」

このようなやりとりをします。中学生・高校生にはそれぞれの年齢に応じた内容で話します。この『奪われた純潔』という絵で、慰安婦がどのような存在であったかがある程度想像できます。興味をもった中学生や高校生は、慰安婦や慰安所の写真のところに連れて行き説明します。この絵や写真により、慰安婦のイメージが具体的になります。この具体的なイメージをもとにして、カンドッキョンさんがどう戦争中を生き、その後どういう人生を送ったのか、どんな思いでこの絵を描いたのかなどを、それぞれの子どもが考えてくれればいいのです。いつか再び、慰安婦ということばに出会ったとき、平和ミュージアムでみたあの絵を思い出してくれるかもしれません。そのときは、慰安婦についてもっと深く思いをめぐらすことができるでしょう。聞く人の心に残るガイドはこのようなものかもしれません。

きっかけ展示ではありませんが、心に留めてほしい展示物に原爆コーナーの「被爆バツクル」があります。このバツクルは、本学名誉教授永原誠氏（故人）の父のベルトのものです。被爆死した永原氏の父の死体は黒こげで、同じような状態の他の死体と区別できた唯一のものがこのバツクルだったのです。身内の人にとっては重い意味のあるバツクルです。展示では、焼けただれたびんなどと並んで置かれているだけです。から、「永原氏の父の遺体がそれとわかった唯一のもの」という、このバツクルの持つ特別な意味が伝わりません。わたしは、永原氏の著書『消えた広島』（ウィンカモガワ）を読むまで、このバツクルのもつ意味を知らなかったの、バツクルについてガイドすることはありませんでした。ガイドするにしても「被爆したバツクルです」としかいいようがなかったでしょう。これでは聞く人の印象に残りません。『消えた広島』にあるように、だれのものとも区別できない黒こげの死体が累々とあるなかで、バツクルの模様でこの死体が父だとわかった時の永原氏の気持ちを想像すると、原爆のむごさがわかるのです。ガイドの説明を聞いた人が、心のなかでその情景を想像し、その時の永原氏の心情を追体験することで、原爆・戦争の実態を心から理解することになるのではないのでしょうか。

被爆バツクルは、ぜひきっかけ展示にしてほしいと思います。それが無理でも、「父の死体がそれとわかった唯一のもの」ということがわかる説明をつけていたきたいと思います。

平和ミュージアムへ来られた方が、1つでも心に残る何かをもっていただけるようなガイドをしたいものです。

常設展示見学者の感想 (2014年8月～2015年5月)

あらためて戦争はよくないと感じました。戦争が起こった時はとても大変で苦しかっただろうなと思いました。これからは平和な国だいいと思います。

小学生 京都府

私はまだ10才だけど、1度も戦争の事を考えたことがなかったのですが、ここに来て本当に昔使っていた道具があって詳しく分かったのよかったです。

小学生 京都府

学校で人権について学ぶ部活に入っていて、その校外学習で来ました。予習をせずに来てしまったため、初めは何の展示があるのか分からなかったけど、言葉・写真・絵・再現などで分かりやすく説明されていたので良かったです。次来る機会があればきちんと予習してきたいと思いました。

高校生 三重県

戦争はこわいと思いました。戦争はもう二度とおきてほしくありません。

小学生 千葉県

武器商人がいる間は戦争はなくなる。満州で行った日本軍の自作自演のようなことは世界で広く行われており、戦争で利益を得る人々にとっては必要なこと。ミュージアムは戦争について再認識させてくれる場所。

会社員 40代 愛知県

学校で話をきいて想像したことよりも悲惨で、見ていて息が苦しくなりそうでした。どんなに会議してもそれでもまだ戦争をしているということは上の人たちは口先ばかりで戦争で犠牲になった人々の事は考えていない、自分勝手すぎると今回ここにきて思いました。小さな子供も犠牲になって死んでいくような事をして何とも感じていないと思うと心が痛くなります。関係の無い人が死ぬのはおかしいと思います。

高校生 兵庫県

映像やパネルなどがありとても分かりやすかった。戦争によってたくさんの方が亡くなり、たくさんの方が傷ついたから、もう戦争をおこしてはいけないと思う。これからも平和ミュージアムを通じてたくさんの人に戦争の被害を知ってもらいたい。

小学生 京都府

とても貴重なミュージアムだと思います。大学生や社会人レベルでしか理解しづらい面もあると思うので、もっと子供（小学生・中学生）にもわかりやすく見せる方法も必要かと思います。小さい子供達に戦争の恐ろしさを伝え、考えさせることはとても大切だと思います。戦争が近づく気配のある今だからこそ日本中の小、中、高、大学生に今、ぜひ見てほしいミュージアムだと思います。又、世界の人々にも京都観光の際には是非訪れてほしいです。

50代 大阪府

戦争について考えさせられるミュージアムだなと思いました。正直とても怖かったです。私はこのような戦争の展示を見るのが苦です。でも戦争については考えないといけないものだし、自分にも関係のあるとても大事なことだと思います。今の日本は戦争はありません。でも他国ではある所もあります。高校生だから大きな手助けはできません。でも、少しでも戦争に苦しんでいる子供たちの支えになれたらいいなと思います。そのためには何をしたらいいかを考えていつか実行できる日まで頑張りたいです。

高校生 兵庫県

これだけの展示を見る機会はなかなかないので、とても良い学習ができました。平和学習は高校の修学旅行（沖縄）に行っていて以来で、そのときは知識もほとんどなかったので今回はまた違った視点で見る事ができました。

大学生 10代 京都府

安部首相がすすめている集団的自衛権の閣議決定や機密保護法について危惧している。平和を願う国民の声が選挙に十分反映されていないもどかしさを感じるが、ミュージアムのように広く平和の尊さを伝える活動に励まされます。

60代 福井県

ピース愛知で立命館大学の山根先生の話を聞きました。同大学に平和学の学びがあると聞き、関心を持ちました。70年間平和を守ってきた日本がこれからも平和を守り続け、世界の平和を守るリーダーとして立っていけるようにしたいと思います。ミュージアム（当館）のこんな素晴らしい教育の場をもっと多くの人、子供達に知ってもらいたいし、伝えたいと思います。平和を守り、世界中の人が仲良く暮らして行く為に自分に出来る事は何か？と思います。今、とても学びたいと思っています。立命館大学平和ミュージアムの働き、活動、本当にありがとうございます。これからも頑張ってください。

自営業 60代 愛知県

※掲載にあたり一部の表記を改めました。

2014年4月
～2015年3月
入館者状況

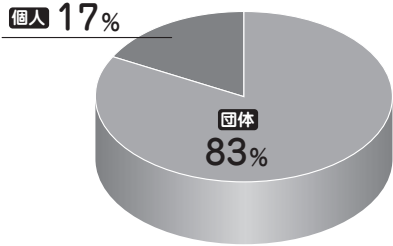
◎開館日数

293日

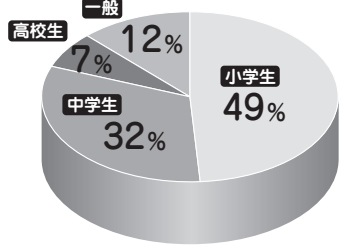
◎オープン後常設展入館者数累計

936,621名

<有料団体・個人入館者状況>



<有料団体入館者数状況>



2014年度	月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	人数/開館日数
総入館者数/開館日数		2,007/25	5,715/27	3,812/25	3,653/27	2,391/26	2,759/18	10,609/27	5,779/26	4,385/20	1,868/23	1,631/23	1,150/26	45,759 / 293
来館90万人		2014年6月17日、来館者90万人（堺市立金岡南小学校6年生）												
特別展	春季特別展「奪われた野にも春は来るか 鄭周河写真展」										会期：5/3～7/19		(67日間)	9,522
	特別展「世界報道写真展2014 -WORLD PRESS PHOTO 2014-」										会期：9/17～10/12		(22日間)	5,101
	京 都（立命館大学衣笠キャンパス 中野記念ホール）										会期：10/14～10/30		(17日間)	1,627
	滋 賀（立命館大学びわこ・くさつキャンパス エポックホール）										会期：11/2～11/16		(15日間)	1,972
	大 分（立命館アジア太平洋大学）										会期：10/21～12/14		(48日間)	12,366
秋季特別展「ピース☆スタイル」														
小 計														
特別展示	「学徒動員、学徒出陣 学生・大学と戦争」展【BKCサンクスデー】（びわこ・くさつキャンパス 石川文洋写真展「戦争と平和・ベトナムの50年」（国際平和ミュージアム ミニ企画展示室）										セントラルアーク） 会期：9/14～10/9		(6/1)	オープン
ミニ企画展示	第85回 ベトナム戦争の傷痕										会期：4/3～4/29			—
	第86回 ロベルト・ユンクの生涯「ヒロシマを世界に伝えるー核の被害なき未来を求めてー」										会期：5/13～6/1			—
	第87回 カンボジアの子どもたち										会期：6/7～7/6			—
	第88回 健康はお国のために ースポーツと戦争ー										会期：7/12～8/29			—
	第89回 第8回立命館附属校 平和教育実践展示（守山、小学校、宇治、長岡京、慶祥）										会期：10/12～12/19			—
	第90回 アウシュヴィッツ解放70年特別展示										会期：1/10～1/31			—
講演会 ほか	「奪われた野にも春は来るか 鄭周河写真展」 オープニングトーク：鄭周河（写真家）、徐京植（作家）、河津聖恵（詩人）（国際平和ミュージアム 中野記念ホール）（5/3） トークセッション：高橋哲哉教授（東京大学）、庵道由香准教授（立命館大学）（国際平和ミュージアム 中野記念ホール）（6/7） トークイベント 福島を見つめた留学生たち（国際平和ミュージアム 2階会議室）（7/19） 来館90万人記念セレモニー（堺市立金岡南小学校6年生）（6/17） NGOワークショップ 男も女も働きやすい社会へ ～身近にある貧困を見てみよう、考えてみよう～（国際平和ミュージアム 2階会議室）（7/1）	122 66 39 127 25												
	講師：山本知恵（京都YWCA総幹事） ※第1回国際平和セミナー“Lessons of 1914 for Asia today”（国際平和ミュージアム 2階会議室）（7/16） 講師：Dr.phil.habil.Andreas Herberg-Rothe 夏休み親子企画「へいわ」ってなに？2014（国際平和ミュージアム 1階ロビー）（7/26） ー被爆し傷ついた故河本明子さんのピアノー 午前・午後各1回（7/29～8/3） 平成26年茨木市非核平和展「さいころくん」を通して見る世界（茨木市立中央図書館）（8日間・7/29、7/30、7/31、8/1、8/26、8/27、8/28、8/29） 小学校・中学校教員対象ミュージアム下見見学会（末川記念会館 講義室）（8/2） 立命館土曜講座「若い世代に語り継ぐ戦争と平和 ー学徒出陣70年から戦後70年をみすえて」（末川記念会館 講義室）（8/30） 3102回「学徒出陣」と大学の戦争責任（末川記念会館 講義室）（8/23） 講師：白井厚名誉教授（慶應義塾大学） 3103回「人貴キカ 物貴キカ」ー防空法制から診る戦前の国家と社会ー（国際平和ミュージアム 2階会議室）（10/2） 講師：水島朝穂教授（早稲田大学） ボランティアガイド学習交流会（国際平和ミュージアム 2階会議室）（10/28） 「立命館大学国際平和ミュージアムのガイドとして活動すること パート2」 講師：安斎育郎名誉館長（創思館カンファレンスルーム）（11/1） ※第2回国際平和セミナー（充光館301教室）（11/15） 平和ワークにおける芸術アプローチ・ワークショップ「平和創造のための芸術アプローチ：紛争解決学から学ぶ」（国際平和ミュージアム 2階会議室）（11/22） 講師：奥本京子教授（大阪女学院大学） 「世界報道写真展2014」講演（創思館カンファレンスルーム）（1/21・1/22） 講師：豊田直巳（フォトジャーナリスト）（国際平和ミュージアム 中野記念ホール）（2/7・2/8 1日2回実施） 【京都会場】衣笠キャンパス（国際平和ミュージアム 2階会議室）（2/18） 【滋賀会場】びわこ・くさつキャンパス ※【共催】「遺言 原発さえなければ」映画上映会 豊田直巳監督トーク（人文研「暴力からの人間存在の回復」研究室）（国際平和ミュージアム 2階会議室）（3/16）	47 97 オープン 103 230 207 51 16 154 593 120 40 5 27 28 86 35 13 175 56 40 10												
	第8回国際平和博物館会議（35カ国、175人出席） テヘラン平和博物館研修生受け入れ ※【後援】国際地域研究所 EUプロジェクト講演会 “The EU Charter of Fundamental Rights and Its applicability to the Member States” 講師：Prof.Dr.Ferdinand Wollenschläger（アウクスブルグ大学） 国際交流報告会（第8回国際平和博物館会議、テヘラン平和博物館交流） ※【共催】立命館大学国際地域研究所「平和主義研究会」第3回研究会 「ベルタ・フォン・ズットナーとノーベル平和賞」 ピース☆スタイル公開記念上映会「イントレピッドの4人」 解説：大野 光明特任助教（大阪大学グローバルコラボレーションセンター） NGOワークショップ エネルギーと平和ー未来のためにわたしたちができることー 講師：伊与田 昌慶（気候ネットワーク研究員） ※【後援】R-GIRO「オール立命館による学際統合型平和研究拠点」 「人間の安全保障」の行方-20年の経験と課題から 京都ミュージアムロード参加特別企画「戦時下のレコード鑑賞会」 ※第3回国際平和セミナー 「ヨーロッパにおけるドイツの役割」 講師：Dr.Ingo KARSTEN 第14回附属校平和研究会 「戦後70年」の取り組みにむけての意見交換	40 5 27 28 86 35 13 175 56 40 10												
	小 計	2,512												

※立命館大学国際平和ミュージアム附属平和研究所準備室にて行った企画（共催、後援を含む）

編集後記

国際平和ミュージアムだよりの様々な記事を通して、歴史的分岐点にある今日どのように考え、行動したら良いのかを考えさせられます。2015年春季特別展では山本宗補氏の写真展「戦後はまだ…刻まれた加害と被害の記憶」が取り組まれました。また現代史が専門で日本軍により加害についても多数の著書がある林博史教授の講演会「加害と被害の重層構造ー日本人の戦争体験をとらえ直す」が開催されました。ある参加者の感想では「事実から目をそむけることが何よりも危険なことだと思います。」とあります。歴史的事実を否定し、加害の展示が平和博物館から削除され、歴史教科書が変更されている今日、大学に存在する平和博物館として訪問者は多くのことを学んでいるようです。海外の平和博物館関係者はこのような動きに注目していますが、そのような中で「平和のための博物館国際ネットワーク」通信（INMP Newsletter 11）で、山本宗補氏の展示について紹介しました。（20015年1月からINMP通信の編集を安斎育郎名誉館長と山根が担当しています。）このような中で学生や大学院生、ボランティアガイドなどの活動は、大変心強く励まされます。立命館大学と京都外国語大学の学生コラボ企画展「心の声〜みて、感じて、考える」、学生による展示「絶望の島から希望の島へ『クリオン島』ーハンセン病と差別の中に生きる人々ー」がありました。ドイツの大学院生のインターンシップでは、常設展示に関するチラシのドイツ語版作成やドイツなど海外の教科書の展示物の更新に取り組みました。

今後も大学立の総合的平和博物館として、充実した展示や活動をしていきたいと改めて思った次第です。

山根和代

世界報道写真展2015 ~WORLD PRESS PHOTO 15~

開催趣旨

世界報道写真展は、オランダに本部を置く世界報道写真財団が毎年開催している「世界報道写真コンテスト」の入賞作品約150点で構成した写真展で、今年で58回目を迎えます。オランダ・アムステルダムを皮切りに世界の約100の会場で開催される世界規模の写真展です。いま、この地球上で起きているあらゆる出来事を、最高の技術と取材力をもって撮影した写真家たちの作品の数々は、人々に現実を強く訴える力を持っています。戦後70年が経過した今なお世界の様々な地域で紛争が続き暴力が絶えない現状を見ると、戦後70年の現実を考える機会として観覧いただけるものと思います。

ときに命がけで撮影された報道写真を間近でご覧いただくことで、世界の現状を知り、いま一度平和とは何かを考えるきっかけにさせていただきたく開催するものです。

京 都

会 期：2015年9月9日(水)～10月4日(日) ※休館日：9/14(月)、9/22(火)、9/24(木)

開館時間：9時30分～16時30分（入館は16時まで）

※毎週金曜日はFriday Night Museum、世界報道写真展のみ19時まで延長開館します。（入館は18時30分まで）

会 場：立命館大学国際平和ミュージアム 中野記念ホール

参 観 料：大人500円、中学生・高校生300円、小学生200円

公開記念講演会

日 時：2015年9月19日(土) 14時～16時30分

会 場：立命館大学衣笠キャンパス 以学館2号ホール

講 師：森住 卓氏（フォトジャーナリスト）

「報道写真家の仕事」

申込不要・聴講無料



「世界報道写真一般ニュースの部 単写真2位」
マッシモ・セステーニ（イタリア）
2014年6月7日、リビア沖
リビアから25キロ北の海で、イタリア海軍
巡洋艦に救助された難民たち。

滋 賀

会 期：2015年10月6日(火)～10月18日(日)（会期中無休）

開館時間：9時30分～16時30分（入場は16時まで）

会 場：立命館大学びわこ・くさつキャンパス（BKC） エポック立命21ホール

参 観 料：大人500円、中学生・高校生300円、小学生200円

主 催：立命館大学国際平和ミュージアム、朝日新聞社、世界報道写真財団

後 援：オランダ王国大使館、公益社団法人日本写真協会、公益社団法人日本写真家協会、京都府
京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会、京都市内博物館施設連絡協議会

NHK京都放送局（衣笠キャンパス開催分）、KBS京都

滋賀県、草津市、大津市、滋賀県教育委員会、草津市教育委員会、大津市教育委員会

NHK大津放送局（びわこ・くさつキャンパス開催分）、びわ湖放送株式会社

大 分

会 期：2015年10月21日(水)～11月4日(水)（会期中無休）

会 場：立命館アジア太平洋大学（APU） 本部棟2階 コンベンションホール

● 詳細はホームページでお知らせいたします。

2015年度秋季特別展 戦後を語る70のカタチ

会 期：2015年10月20日(火)～12月13日(日)

開館時間：9時30分～16時30分（入館は16時まで）

※毎週金曜日はFriday Night Museum、特別展のみ19時まで延長開館します。（入館は18時30分まで）

会 場：立命館大学国際平和ミュージアム 中野記念ホール

休 館 日：月曜日（ただし、11月23日(月・祝)は開館）、11月4日(水)、11月24日(火)

参 観 料：大人400円(350円)、中・高生300円(250円)、小学生200円(150円)

※常設展もあわせてご覧いただけます。上記（ ）内は20名以上の団体料金です。

※関西文化の日 11/14(土)・15(日)は入場無料です。

開催趣旨

戦後、日本は第二次世界大戦への反省から戦争放棄と平和主義を理念とする日本国憲法を制定し、「二度と戦争は起こさない」という誓いを、日本国憲法前文及び憲法九条を通じて世界へ表明・発信してきました。しかし今、私たちは日中戦争・アジア太平洋戦争を含む一五年戦争とどのように向き合ってきたのか、その後の社会をどのように築いてきたのかが問われています。

本展では、戦前・戦後を通じて形成されてきた矛盾や問題点と戦後体制の関係性や現代的矛盾の本質を、「戦後の歴史的転換」期とよばれる今日の時点で真摯に見つめ直し、再考していきたいと考えます。

戦後と言えば、敗戦直後の焼け野原の風景、洗濯機やテレビなど戦後の日常を彩り生活を変えた品々、東京オリンピックや万博のような華やかなイベントは多くの人々の記憶に鮮明に浮かび上がります。一方、戦争犯罪裁判、抑留・引揚、戦争による棄民、戦後開拓など、戦争の影響や戦前から断続する政治や経済の流れを問う資料、反核運動や反戦・平和を求める市民運動に関する資料など、戦後にはそれを語る多様なカタチ（＝資料）があります。

本展では、戦後70年にちなみ、私たちにそうしたことを問いかける70件の資料を展示します。



パンフレット『みんなの万国博』
(1970年)



雑誌『週刊アンボ』創刊号
(1969年)

主 催：立命館大学国際平和ミュージアム

後 援：京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会、京都市内博物館施設連絡協議会
NHK京都放送局、KBS京都、朝日新聞社、京都新聞、毎日新聞社、読売新聞社

関連イベント

●連続講座「70年目の戦後史再考」

日 時：10月2日(金)～30日(金)の各金曜日(全5回)

会 場：立命館大学衣笠キャンパス 創思館カンファレンスルーム

※10月9日(金)のみ会場は立命館大学国際平和ミュージアム2階会議室

主 催：立命館大学国際言語文化研究所

共 催：立命館大学国際平和ミュージアム

●映画上映会

『家族』(山田洋二監督 1970年公開・松竹)

日 時：11月7日(土)13時30分～16時

会 場：立命館大学衣笠キャンパス 充光館地階301教室

解 説：番匠 健一氏

(立命館大学生存学研究センター客員研究員)

参加費：無料

